

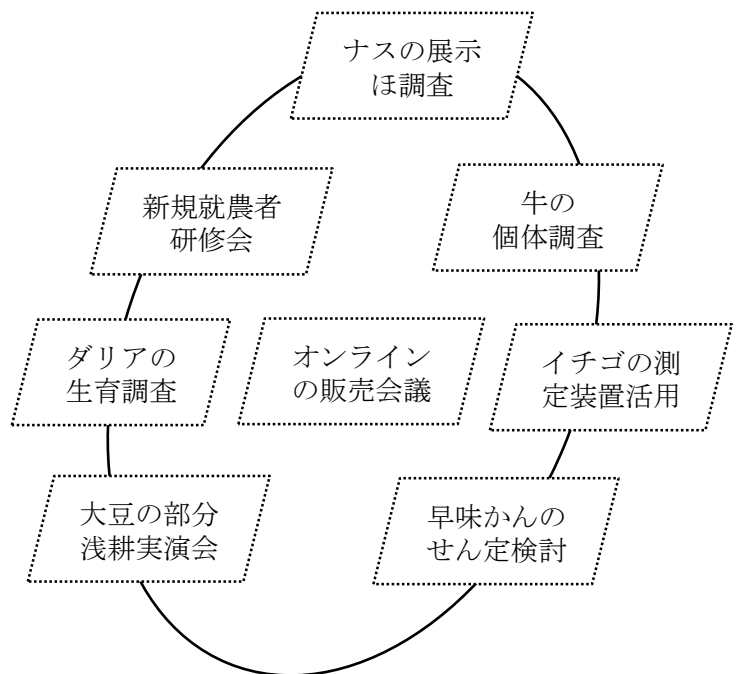
令和3年度 普及活動成果集

若手農業者が活躍する
未来に続く 南筑後の農業



令和4年3月
福岡県筑後農林事務所南筑後普及指導センター

表紙の説明



はじめに

南筑後普及指導センター管内は、福岡県の南部に位置し、耕地面積は約11,000ha（田が87%、普通畑・樹園地が13%）で、福岡県の14%を占めています。

平坦・干拓地では水稲・麦・大豆に、イチゴ、ナス、アスパラガス、セルリー等の施設野菜が、東部の山麓地帯の樹園地ではミカン、ブドウ等の果樹が栽培され、花きや畜産を含めて優れた農業経営が行われています。

当センターでは、福岡県で平成29年3月に作成した「福岡県農林水産振興基本計画」の実現と、地域農業の課題解決に向けて、活動を行っております。

特に、令和3年度は「若手農業者が活躍する未来に続く南筑後の農業」の実現を目標に、普及指導年度計画を作成し、効率的な普及活動を展開してきました。

令和3年度は、8月の記録的な豪雨により、作物の浸冠水害に、施設の被害など大きな気象災害に見舞われました。特に、大豆では長時間の冠水により、株が枯死するなど、甚大な被害となりました。

加えて、前年からの新型コロナウイルス感染症の感染拡大により、社会情勢の変化への対応も続きました。

そのため、十分な成果を上げることができなかった活動もありましたが、生産部会・JA・市町等の関係機関・団体と連携した活動で、一定の成果が見られた課題もありました。

この成果集は、令和3年度に当センターで行った活動の一端を掲載したものです。まだまだ、発展過程にある課題も多くありますが、経営改善や技術向上の手法、地域や産地の振興方策等への参考にしていただき、今後の農業経営の改善、地域農業の発展にご活用いただければ幸いです。

令和4年3月

筑後農林事務所南筑後普及指導センター長 藤木 宣時

目 次

	ページ
I 普及活動の主な成果	
1 次世代を担う経営体の育成によるカンキツ産地の維持	1
2 リーフレタス産地づくりと柳川の園芸振興	3
3 集落営農法人の経営力強化	5
4 次世代を担う多様な担い手の確保・育成	7
5 足腰の強い水田農業経営に向けて	8
6 ICT活用によるナスの安定生産	9
7 産地の目標となるイチゴ経営モデルの育成	10
8 「シャインマスカット」高品質化によるブドウ産地強化	11
9 次代を担う花き生産者の経営安定	12
10 和牛子牛の発育向上について	13
II トピックス	
1 JAみなみ筑後トレーニングファームが設立	14
2 大木町の松藤富士子氏が令和3年度秋の褒章において黄綬褒章を受章	15
3 柳川市の中島みゆき氏が令和3年福岡県農業指導功労者表彰を受賞	15
III 令和3年の気象概況と対応	
1 気象概況	16
2 主な気象とその対応	17
IV 令和3年度現地活動情報及び主な展示ほ成果の概要	
1 現地活動情報	19
2 主な展示ほ成果の概要	20
V 普及指導センター活動体制	21

I 普及活動の主な成果

[1] 次世代を担う経営体の育成によるカンキツ産地の維持

1 課題化の背景

J Aみなみ筑後管内は園芸農業が盛んであり、特にカンキツは全国でも有数の産地であるが、生産者の高齢化や後継者不足により産地規模の縮小が進行している。

そこで、産地の生産力を維持・強化するため、個別経営体の経営強化を図るとともに労働力確保に向けたシステムづくりや新たな担い手の確保、育成を支援した。

2 活動の内容

(1) 重点支援経営体の経営改善

個別面談により抽出した4つの課題（①労働力確保、②「早味かん」の収量、品質の向上、③「北原早生」の連年安定生産、④新規就農者の面積拡大）に対して、それぞれの課題を解決するモデルとして8経営体を選定した。

①については、経営規模の大きい生産者や重点地区（伍位軒集落）を対象に労働力支援団体の紹介を行った。また雇用を希望する農家に対し、関係機関と連携して、労働力支援団体との具体的な雇用計画に関する協議を支援した。②・③については、年間を通じた生産安定技術の展示ほの設置と研修会、④については、面積拡大する際の品種構成に対する助言や苗木定植の技術支援を行った。



写真1 重点地区での説明会

企業	①国籍及びスタッフ数	②雇用条件	③契約期間	④単価(円/時間)	⑤残業・休日勤務	⑥労働時間	⑦申込み	⑧キャンセル	⑨交通費	⑩社会保険	⑪宿泊施設	⑫備考
A	特定技能外国人 (男女比は1:1)	2人以上	基本は 3カ月以上	1,400~1,500円	8時間/日超過 は時給×25%増	上限:208時間 8時間×26日 下限:180時間 ※180時間分給与の保証が必要	2カ月前から スタート	申込み時に要 相談	前労働地からの 移動費用 (片道実費)	単価に込 み	必要 WIFI完備	宿泊費本人負担 水道光熱費込み 15,000円/月最大 5人まで。 人数分の自転車
B	・日本人(主婦、学生、Wワーカー) ・外国人 合計500人程度	1人から可	日単位	1日単位 時給で換算すると 1,450円重労働は 1,500円	基本的に残業 はなし	—	1週間前まで	基本は前日連絡 ただし、早朝でも間に合う事もある	1人当たり旅費 は車代(2,000円程度)+燃料 費(距離)+高速代(実費)を 人数割り	単価に込 み	不要	交通費が人数割りのため、交通費が高くなる場合がある。
C	・基本的に日本人 ・永住権を持つ外国人が数名 ・過去には外国人の登録事例あり	1人から可	日単位	最低1,500円 (募集時に決定)	週40時間を超える分は時給の25%増し	160~176時間/月(20~22日/月)	人員確保には2カ月程度前までに申込み	基本は前日連絡(職員)ただし、早朝でも間に合う事もある	単価に含まれる	単価に込 み	不要	雇用主の依頼に応じて募集。休業補償を条件にすると応募が多くなる。

図1 労働力支援団体の比較

(2) 新規就農者の確保、育成

柑橘部会の部会員に対して、就農促進パンフレットを配布・説明し、定年・Uターン就農の促進を行った。

また、新規就農者の早期経営安定化及び定着を図るため、部会と連携し、新規就農者向けの基礎技術研修会や個別巡回支援を行った。

3 主な成果

(1) 重点支援経営体の経営改善

①については、労働力支援団体側に昨年度の問題点の改善を申し入れたことにより、作業性の改善が見られ、利用農家の満足度が向上した。また農家と新規就農を希望する研修生とのマッチングを行い、合せて4経営体が労働力確保により売上を増加させることができた。このうち1戸の農家が労働力支援団体を収穫作業で利用し、収穫量や作業状況などを調査した。



写真2 日焼け対策展示ほ

この結果を解析し、生産者ごとの収穫性、価格などの利用条件でシミュレーションを行えるように今後計画する。

また、収穫期間に安定した雇用が必要な生産者については、収穫作業がない日の対応について引き続き課題が残った。引き続き関係機関と協議を行い、農家に合う支援策の協議を行う。

②・③については、各2経営体が、樹勢回復と日焼け果対策に取り組み、出荷量が増加して収益増加につながった。今後は全体への普及を行う。

④については、2経営体で目標を上回る経営規模の拡大が進んだ。うち1経営体は、管内で計画されている大規模基盤整備に参加する意向があり、労力、資金などの面で支援を行って行く予定である。

(2) 新規就農者の確保、育成

今年は3名が新規就農した。また、直近5か年の新規就農者10名のうち6名が収量向上により自己目標を達成した。

[2] リーフレタス産地づくりと柳川の園芸振興

～水田農業への園芸品目の導入、産地を支える農業者の育成～

1 課題化の背景

柳川地域は、米・麦・大豆による水田農業を中心に、施設野菜、露地野菜等の多様な園芸農業が盛んな地域であるが、高齢化による農家数の減少と産地規模の縮小が懸念されている。

そこで、露地栽培で取り組めるリーフレタスを新規品目として導入し、新たな産地づくりの推進を行った。また、産地規模の維持拡大に向け主要品目の強化を図るため、生産部会と連携して産地強化計画を作成し、生産量・販売額の向上を支援した。併せて、新たな担い手の発掘・確保・育成に取り組んだ。

2 活動内容

(1) リーフレタスの産地づくり

関係機関（市、J A）と連携して産地づくり支援会議を開催し、前年の生産販売の実績検討を行った（写真1）。令和2年産は市場価格の低迷により所得の確保ができなかったため、価格安定事業への加入や契約販売の提案を行った。また、個別に巡回指導を行い生産の安定を図った。



写真1 産地づくり支援会議

(2) 園芸産地の強化

J A柳川の園芸の主要品目として、ナスイチゴ、アスパラガス、オクラを選定し、産地強化計画の作成、実践を支援した。昨年、計画を作成したナス、オクラは、展示ほの調査等を実践し（写真2）、イチゴ、アスパラガスは、役員会においてSWOT分析を行い、現状分析、戦略の検討等を行うとともに、生産・販売強化計画の作成を支援した。



写真2 ナスの展示ほ調査
（整枝方法の検討）

(3) 担い手の確保・定着

「柳川市新規就農者等支援会議」を中心に、月1回の定期的な就農相談会を開催し、就農希望者の就農計画策定支援を行った。

また、イチゴ、アスパラガスでは、新規栽培者を対象として、個別に巡回支援を行い、早期の技術習得と就農定着を図った。

3 主な成果

(1) リーフレタスの産地づくり

リーフレタスは、新型コロナウイルス感染症や気象（高温）の影響等により、栽培開始から3か年連続で市場価格が低迷したため、作付面積の縮小や品目変更等を行う生産者が多く、産地化は難しい状況となった。

(2) 園芸産地の強化

関係機関（市、JA）と連携し、毎月園芸部会産地強化支援会議を行うことで計画の作成・実践の進捗管理ができた。

アスパラガスでは、次年度に取り組む課題の明確化、優先順位付けを行い、産地強化計画を作成した。

園芸品目の販売額は、ナスの新技术導入による収量向上、イチゴ、アスパラガスの新規就農者の増加等により、28億6千万円から29億3千万円に増加した。

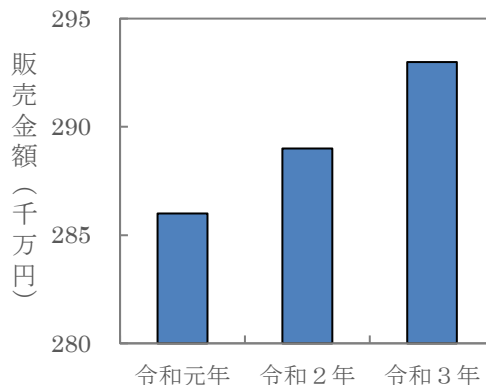


図1 園芸品目販売金額の推移
(ナス、イチゴ他 16 品目)

(令和3年：令和2年4月～令和3年3月)

○アスパラガスの課題と振興方向 「強みを伸ばし、弱みを克服するアイデア」

	外部環境	機会	脅威
内部環境		<ul style="list-style-type: none"> 需要が安定している 単価が安定している 健康ブーム 産地地消の意識 出荷時期が早い 	<ul style="list-style-type: none"> 施設建設費、資材費の高騰 異常気象・高温障害 大雨による浸水 高齢化が進んでいる 雇用の確保が難しい (時期ごとの作業量のばらつき、ハウス内の高温) 用水に塩分が多い場合がある 新型コロナウイルス感染症 ピーク時期に早出ししなければならない
強み	<ul style="list-style-type: none"> 新規就農者が増えている 若い生産者が多い 共同選果場で、調整時間が短い 部会組織があり、情報共有ができる 試食・宣伝を積極に行っている 高収量者が多い トレーナー制度があり、新規就農者が取組やすい 部会平均単収が高い 真空予冷庫がある 	<p>強みを生かす積極的戦略</p> <ul style="list-style-type: none"> ◆新規就農者の定着、育成 ◆ブランド化 ◆販売の多様化、6次化 ◆高収量技術分析 ◆新たな規格 	<p>強みを生かして脅威を回避する</p> <ul style="list-style-type: none"> ◆高温対策 (遮光資材など) ◆大雨対策 (排水など) ◆土壌分析に基づく効率的な施肥管理
弱み	<ul style="list-style-type: none"> 茎枯病による欠株 病害虫の多発 改修技術が確立されていない 冬場の収入がない ハウスが多いと灌水に時間がかかる 経営面積が小さい 共同選果場の規模が小さい 	<p>弱点のためにチャンスを見逃さないような対策</p> <ul style="list-style-type: none"> ◆病害虫対策 ◆改修技術の確立 ◆収穫ロボット ◆自動かん水による省力化 ◆スマート農業による生産技術の安定化 ◆新たな品種試験 	<p>弱点を克服する防衛策</p> <ul style="list-style-type: none"> ◆冬場の補充品目の試作 ◆雇用調整の仕組みづくり ◆新規就農者の研修制度 ◆工業用資材などを活用した施設建設による低コスト化

表1 アスパラガス部会のクロスSWOT分析

(3) 担い手の発掘・確保・定着

新規就農者は、令和3年は新たに4経営体を確保することができ、令和元年の4経営体から令和3年の15経営体となった。

品目別では、イチゴで3名、アスパラガスで4名、ナスで4名が就農し、栽培基礎講座、個別巡回等の支援により、就農定着が図られている（写真3）。

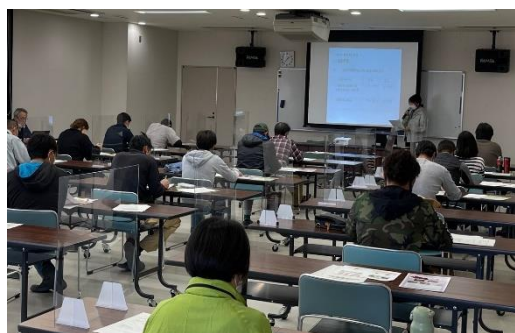


写真3 イチゴ栽培基礎講座

[3] 集落営農法人の経営力強化

～足腰の強い土地利用型法人の育成に向けて～

1 課題化の背景

南筑後普及指導センター管内では、集落営農組織の法人化が進み、86 組織が法人化している。しかし、各法人の運営及び経理管理はそれまでの任意組織の方式のまま活動しているケースがほとんどで、土地利用型法人としての経営基盤が不十分であった。

そこで、令和元年～3年の取り組みとして、管内の集落営農法人を対象に、効率的な土地利用・基幹作業の共同化・プール計算方式の導入により経営力を強化したモデル法人を育成するとともに、他の法人への波及を図った。

また、経営改善の意向のある組織に対して、作業の共同化やブロックローテーション、品種の団地化等による経営の効率化を図った。

さらに、平成28～30年度に法人が策定したステップアップ計画について、令和元年度時点で目標未達成であった10法人に対して、目標達成に向けた重点支援を行った。

2 活動内容

活動は、4地区（南筑後、柳川、大川、大木）ごとの活動を基本に、関係機関（普及指導センター、JA、市町）で組織した各地区の担い手支援チーム会議を活動母体として以下の活動を行った。

(1) モデル法人の育成

担い手支援チーム会議で支援方針を決定し、法人役員会へ参画してプール計算方式の導入の提案・協議を行った。

(2) 集落営農法人の体制整備

経営改善の意向のある組織の中から、実現可能性の高い7組織を担い手支援チームで選定し、法人役員会へ参画して、基幹作業の共同化やブロックローテーション、品種ごとの団地化等を推進した。

(3) ステップアップ計画の目標達成支援

各地区の法人連絡協議会への助言指導を行うとともに、講習会の実施（写真1）や、法人面談（写真2）等により、ステップアップ計画で設定した目標の達成を支援した。

また、法人リーダー研修会を実施して



写真1 麦類講習会

法人役員の経営力向上を図った。さらに、法人の連携強化に関する意向調査を行った。

3 主な成果

(1) モデル法人の育成

令和元年度にA法人が一部のは場の水稲・麦類・大豆について、B法人が大豆でプール計算方式を導入した。

令和3年度には大豆と麦類でプール計算方式を導入していたC法人が、新たに水稲でプール計算方式を導入した。

また、D法人では、畦畔除去の事業後に共同作業とプール計算方式の導入を検討することとなった。

(2) 集落営農法人の体制整備

令和2年度にE法人が大豆の団地化、F法人が麦類収穫の共同化に取り組んだ。

令和3年度にはG法人が水稲移植の共同化に取り組んだ。

また、令和3年度に大豆で「部分浅耕一工程播種」の導入支援（写真3）を行ったことで、H法人とI法人において共同播種の導入に向けた機運が高まった。

(3) ステップアップ計画の目標達成支援

令和元年度にJ法人とK法人が麦類の目標収量を達成し、L法人が土壌改良資材の散布、土壌灌漑システムを実施した。

令和2年度では、M法人が中核的農家の後継者をオペレーターとして確保した。

令和3年度ではN法人が麦類の目標収量を達成し、O法人が水稲品種「実りつくし」の団地化を実施した。

なお、令和3年度の大豆は、「部分浅耕一工程播種」の導入支援や適期播種指導を行ったために早期播種を実現でき、順調に生育していたが、8月中旬の大雨による冠水被害で目標収量を達成できなかった。



写真2 法人面談



写真3 部分浅耕一工程播種の実演会

[4] 次代を担う多様な担い手の確保・育成

1 課題化の背景

南筑後地域では、農業従事者が減少傾向にあること、また女性農業者の経営参画の機会が少ないなどにより、産地の維持が懸念されている。そのなかで、次代を担い地域の農業を支えていく新規就農者の確保・育成と女性農業者の育成が重要な課題となっている。

そこで、新規就農者に対しては、関係機関と連携し、サポート組織による確保・育成に取り組んだ。女性農業者に対しては、経営への参画意欲の向上を図るため、各種研修の開催やキャリアプラン等の策定支援を行った。

2 活動の内容

(1) 新規就農者の確保・育成

就農希望者をサポートするため、関係機関（市町、JA）と連携し、定期的な就農相談会の開催を行った（写真1）。新規就農者に対しては、農業簿記等の基礎知識の習得に向けた研修の開催や就農定着に向けた個別巡回支援を実施した。



写真1 就農相談会

(2) キャリアプランの作成支援

みやま市でミカンを栽培する女性農業者を対象に、将来の経営目標の策定を目標とした年4回のキャリアプラン作成講座を開催し、キャリアプラン作成に向けた支援を行った（写真2）。



写真2 キャリアプラン作成講座

3 主な成果

(1) 新規就農者の確保・育成

令和3年度は、令和4年1月末現在でのべ111件の就農相談に対応し、24名の新規就農者が確保された。また、平成28年度就農者39名の就農6年目での定着率について、100%を達成することができた。

(2) キャリアプランの作成支援

キャリアプラン作成講座に参加した7名の女性農業者は経営の課題や問題点等を整理し、将来の経営目標を定めたキャリアプランを策定した。また具体的に目標を設定し戦略を練る中で、経営参画への意識が高まった。

[5] 足腰の強い水田農業経営に向けて

1 課題化の背景

水田農業では担い手の高齢化や後継者不足、さらに米価の低迷や気候変動に起因する収量品質の低下などの問題を抱えている。そこで、水田農業の経営力強化に向け、スマート農業を含む省力・低コスト栽培技術の導入と普及、並びに水稻新品種「実りつくし」の安定生産に取り組んだ。

2 活動内容

(1) 省力・低コスト栽培技術の導入と普及

管内の大規模農家を含む 65 経営体がメンバーとなっている「省力・低コスト栽培研究会」に対して、ドローン防除や大豆部分浅耕播種、水稻乾田直播等に関する研修会を開催し、省力・低コスト栽培技術の推進を行った。

(2) 「実りつくし」の安定生産

施肥改善と中干しの徹底を図る栽培資料を配布するとともに、栽培指標田と実証ほを設置し、講習会及びタイムリーな栽培情報発信を活用して、水管理や穂肥及び病害虫防除についての適正管理を促した。



写真1 研修会（ドローン防除の講習）

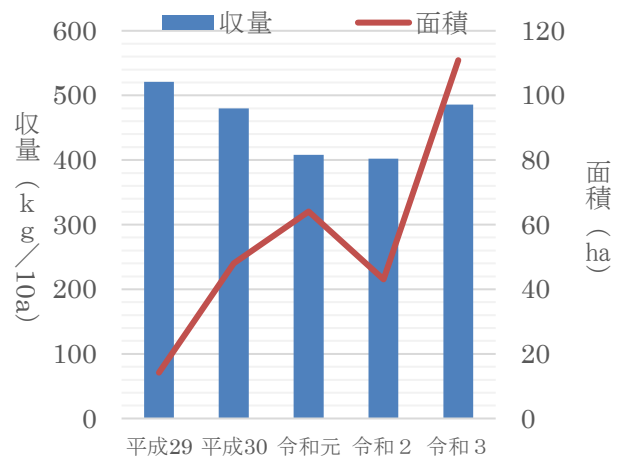


図1 「実りつくし」の収量と面積の推移

3 主な成果

(1) 省力・低コスト栽培技術の導入と普及

大豆部分浅耕播種は6経営体が導入するとともに、一部の市町が補助する動きがあるなど、関係機関を巻き込んだ取り組みにつながった。スマート農業は7経営体が新たに取り組み、ドローン6台、直進アシスト田植機・トラクタ各2台等が導入された。

(2) 「実りつくし」の安定生産

平成29年から本格的に生産を始めたJA柳川では、令和3年は前年に比べ収量は21%増加し、面積は2.5倍に拡大した（図1）。

[6] ICT活用によるナスの安定生産

～ICTの活用と「PC筑陽」の安定生産を支援～

1 課題化の背景

南筑後地域の促成ナス栽培では、光合成促進装置と環境測定装置および着果促進処理が不要な省力化品種「PC筑陽」の導入が進んでおり、これらを活用した生産性向上が求められている。このため、ICT（情報通信技術）を活用した環境制御技術と「PC筑陽」の安定生産技術の普及に取り組んだ。

2 活動の内容

(1) ICTの推進

環境測定装置導入者（37戸）を対象に個別相談会とICT研究会を開催し、環境制御技術の課題整理と、生産性向上のための技術情報の提供を行った（写真1）。また、「ICT導入の手引き」を作成し、未導入者に対しても環境制御技術の情報提供を行い、ICTの導入推進を図った。

(2) 「PC筑陽」の安定生産

「PC筑陽」の栽培技術実証ほを設置し、その成果を現地検討会等で情報提供して栽培技術の普及・定着を図った。また、単為結果性品種の特性に対応した「博多なす栽培の手引き」を活用し、温度管理や着果数管理などの技術啓発を行った。



写真1 ICT研究会の様子

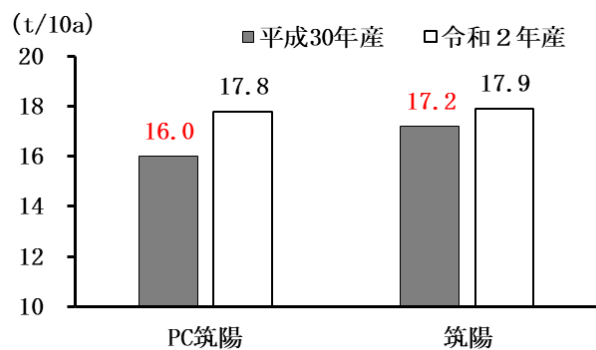


図1 なす品種別の平均収量（管内JA）

3 主な成果

(1) ICTの推進

ICT導入者は平成30年産の26名から令和3年産で37名に増加した。また、令和2年産の平均収量はICT活用者が20.5 t/10aとなり、部会平均と比べて115%の増収となった。

(2) 「PC筑陽」の安定生産

「PC筑陽」の栽培管理技術の向上により、令和2年産の収量は平成30年産と比べて111%の増収となった（図1）。

[7] 産地の目標となるイチゴ経営モデルの育成

～収量向上と規模拡大で産地の維持・拡大～

1 課題化の背景

管内のイチゴ産地では、60歳以上の生産者が約40%を占め、今後、生産者の減少による産地縮小や生産量の低下が懸念される。

このような状況下、生産量を維持・拡大するには、収量向上や個別経営の規模拡大が必要である。そこで、産地内のイチゴ農家の目標となる高収量・大規模経営のモデルを育成し、その波及効果により産地の維持・拡大を図る。

2 活動の内容

(1) 収量向上

収量向上を目指す生産者をJA毎に組織化した。これらのグループに対し高収量生産者の栽培管理情報を提供するとともに、環境測定装置を用いたハウス内環境把握と生育診断に基づいた検討会を開催し生産技術改善を支援した（写真1）。

(2) 規模拡大農家の育成

大規模経営を志向する農家9戸を組織化し、経営計画の策定を支援するとともに大規模先進農家の視察、雇用型経営研修会及び個別面談を行った。

3 主な成果

(1) 収量向上

温度管理技術やかん水管理技術が向上し、収量向上を支援したグループ20戸のうち12戸が平成29年産に比べて収量が向上した。このうち2戸は6t/10aを超えた。

(2) 規模拡大農家の育成

支援対象農家全てが規模拡大に向けた経営計画を策定し、令和元年～3年度の3年間で2戸が経営規模を拡大した（写真2）。また、他の農家も将来の規模拡大に向けて課題解決に取り組んでいる。



写真1 環境測定装置を活用した検討会



写真2 規模拡大したハウス（空きハウス利用）

[8] 「シャインマスカット」高品質化によるブドウ産地強化

～赤秀品率を高めて単価の向上と販売金額の増加～

1 課題化の背景

J Aみなみ筑後山川ぶどう部会は、平成25年からブドウ優良品種「シャインマスカット」を導入し、令和元年には導入戸数20戸、面積2.9ha、集荷量37tまで増加した。

しかし、集荷量が増加する一方で、品質のバラつきが販売上の課題となり、産地間競争による単価下落が懸念された。

そこで、「シャインマスカット」の集荷量を拡大させつつ、高品質生産に取り組むことで、単価の向上による販売金額の増加を図った。

2 活動の内容

「シャインマスカット」高品質化による売上向上

高品質化を目的とした着果数の違いや果実袋の種類の試験ほを設置した。また、J A営農指導員と連携して園地毎に栽培管理評価表を作成し(図1)、園地の状況が見える化するとともに、評価を基に個別指導や講習会を実施した。これらの取り組みを通じて生産者の栽培管理技術を底上げし、赤秀品率向上による販売金額の増加を図った。

3 主な成果

(1) 管理状況の見える化による品質向上意識の高まり

園地毎の評価に基づいた指導の結果、房づくりや適正着果数、収穫適期といった品質向上のための栽培管理に対する生産者の意識が高まった。

(2) 販売金額の増加

講習会や個別指導により、栽培管理技術の統一を図ったことで、生産量の安定とともに赤秀品率が高まり、令和3年の単価は1,960円/kgとなり、令和元年と比較して29%向上した。また、成木化や面積拡大も伴って、生産者1戸あたりの売上が増加し、「シャインマスカット」の部会販売金額が約2倍に増加した(図2)。

令和3年産 シャインマスカット園地栽培管理評価表

作型	面積 (a)	樹齢 (年)	調査日	適正房重	適正着果量 (房/m)	LAI(水回り期 ～収穫期)
-	-	-	-	400g	8房/m (4000房/10a)	2.8程度
加温	10	7	6/9、6/21	500～600	25房前後	2.5程度
雨よけ		2	6月9日	600	16前後	2
トンネル	4	4	6月9日	400前後	14	2
トンネル	7	4	6月9日	400前後	12(上部枝梗2 房あり)	2

図1 園地栽培管理評価表(一部抜粋)

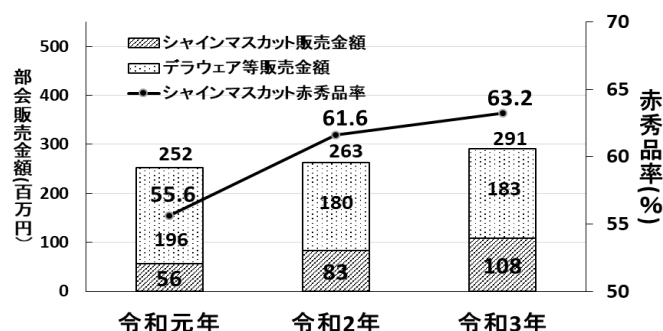


図2 部会販売金額とシャインマスカット赤秀品率の推移

[9] 次代を担う花き生産者の経営安定

1 課題化の背景

南筑後地域では多様な花き品目が栽培されているが、高齢化による産地の縮小が懸念されており、次代を担う花き生産者の育成が急務である。

そこで、今後の産地を担う若手生産者に対し、令和元年度に個別経営カウンセリングで設定した目標の達成に向けて支援を行い、経営の安定を図った。

2 活動の内容

(1) 若手生産者の経営安定

経営者意識の高い8名の若手生産者に対して年度初めに個別経営カウンセリングを行い、経営目標を確認し、課題解決計画の策定を支援した。さらに、各生産者の目標達成へ向けて個別巡回指導や生産改善展示ほの設置を行った。

年度末には、各自の出荷データや経営データを基に分析を実施し、課題解決状況の確認と活動の振り返りを行った。

(2) 勉強会の開催

花き先進経営体視察研修会や施設園芸設備勉強会を開催し、経営意識の向上を支援した（写真1）。また、オンラインで主要市場と品種検討会や販売反省会を開催し、品種選定や優良品種導入等に向けた情報交換を行った（写真2）。



写真1 先進経営体視察研修会



写真2 オンライン販売反省会

3 主な成果

重点支援や現地指導により、トルコギキョウの出荷率向上、ダリアの優良品種の導入などにより出荷量が増加した。若手生産者8名中4名がダリアの坪収量150本/坪やトルコギキョウの売上向上などの目標を達成し、昨年度と合わせて7名が目標を達成した。

[10] 和牛子牛の発育向上について

～性選別精液の利用促進～

1 課題化の背景

管内の和牛繁殖農家戸数は年々増加傾向をたどっている。子牛市場では、後継牛として有望な雌子牛を除けば、雌子牛より雄子牛のほうが販売価格は高い。一方、現在性選別精液が流通しており、これを活用し、雄子牛の出荷割合を高めることは和牛繁殖経営の発展のため有効である。そこで普及センターでは和牛の性選別精液の利用推進に取り組んだ。

2 活動の内容

(1) 和牛の雄精液利用の推進

毎月の出荷市場のデータを取りまとめ、雄子牛価格及び雌牛価格の情報を発信し、雄子牛の市場性の高さを示して、雄精液の利用を推進した（写真1）。

(2) ゲノム研修会の実施

管内の和牛繁殖農家に対し、本牛の遺伝子情報を迅速に得られるゲノム育種価について理解を深めるとともに、県内の雌牛の産肉能力項目別優良牛の血統構成を共有するため研修会を開催した（写真2）。

3 主な成果

(1) 和牛の雄精液の利用者数

和牛の雄精液の推進を実施した結果、利用農家は令和元年の2戸から令和3年は8戸に増加した。また、出荷雄子牛割合は、令和元年の56%から令和3年は61%に増加した。

(2) ゲノム研修会

管内和牛繁殖農家に対して研修会を実施し、ゲノム育種価及び血統分析情報について理解が深まった。



写真1 市場の出荷子牛群



写真2 ゲノム研修会風景

Ⅱ トピックス

〔1〕 JAみなみ筑後トレーニングファームが設立

JAみなみ筑後は、次世代の担い手を育成するため、令和3年度にイチゴの研修施設「トレーニングファーム」を建設しました。

トレーニングファームでは、イチゴでの就農を希望する研修生を毎年2名ずつ受け入れる予定で、本年も2名が令和4年度就農を目指して研修を開始しました。

研修では、現役の生産者を講師に迎え、イチゴの多収栽培技術を直接学ぶだけでなく、土壌肥料や農薬、農業経営、農業機械の操作など農業の基礎知識を座学や実習を通じて学べるカリキュラムとしています。

管内では、市、JA、普及指導センターをメンバーとする「みやま・大牟田地域新規就農支援協議会」を設置しており、研修生が営農開始するための事前準備をサポートするとともに、いち早く経営を安定させ定着できるように、就農後も継続した支援を行うこととしています。



写真1 トレーニングファーム



写真2 管理作業に励む研修生

〔2〕 大木町の松藤富士子氏が令和3年秋の褒章において黄綬褒章を受章

令和3年11月3日に、大木町の松藤富士子氏が令和3年秋の褒章において黄綬褒章を受章されました。黄綬褒章は、農業、商業、工業等の業務に精励し、他の模範となるような技術や事績を有する方に授与されるものです。

松藤氏は、農家レストラン「株式会社ビストロくるるん」の代表としてリーダーシップを発揮し、食を通じた農業の魅力発信や地域での食育活動などに積極的に取り組まれています。また、法人メンバーとしてシメジ、アスパラガスの生産や女性の機械オペレータの普及に貢献されるなど、農村地域の女性農業者として活躍の場を拡げ、女性活躍に寄与されていることが高く評価され、今回の受章に至りました。

なお、例年東京で行われていた伝達式及び天皇陛下への拝謁は新型コロナウイルス感染症の感染状況に鑑み実施されず、11月25日に県知事から受章の伝達が行われました。



写真1 県庁での表彰伝達式の様子

〔3〕 柳川市の中島みゆき氏が令和3年度福岡県農業指導功労者表彰を受彰

令和4年2月1日に、柳川市の中島みゆき氏が令和3年度福岡県農業指導功労者表彰を受彰されました。当表彰は、優れた農業者の育成を通じて、魅力ある農業農村を築くため農業青年の確保に熱心に取り組み、本県農業の持続的な発展に大きく貢献した農業指導者の功績を讃え、福岡県知事が表彰するものです。

中島氏は、水田作、促成ナスの専業農家として経営を確立され、平成8年から女性農村アドバイザー、平成18年からは指導農業士として14年間にわたって、農業青年の育成と地域農業の発展に寄与されました。

また、「まかせな菜・みつはし」を主宰し、味噌・こうじ加工や地域の催しへの参画、サツマイモのほ場管理や収穫など地元4Hクラブとの連携などの地域活動にも、積極的に取り組まれています。現在は、JA柳川の理事として地域の農業発展に務められています。

2月4日にセンター長から伝達が行われました。



写真2 普及指導センターでの表彰伝達式の様子

Ⅲ 令和3年の気象概況と対応

[1] 気象概況

令和3年の気象の特徴には、次のことが挙げられる。

- ① 1月下旬～4月上旬の高温傾向（期間平均気温 平年比+2.7℃）
- ② 5月15日頃の梅雨入り（平年より20日、令和2年より27日早い）
- ③ 5月20日の大雨（降水量アメダス大牟田115.5mm、アメダス柳川100.0mm）
- ④ 6月中旬から7月下旬の小雨傾向（期間降雨量182mm、平年比23.4%）
- ⑤ 8月11日～15日にかけて（期間降水量アメダス大牟田855.0mm、アメダス柳川713.5mm）の大雨

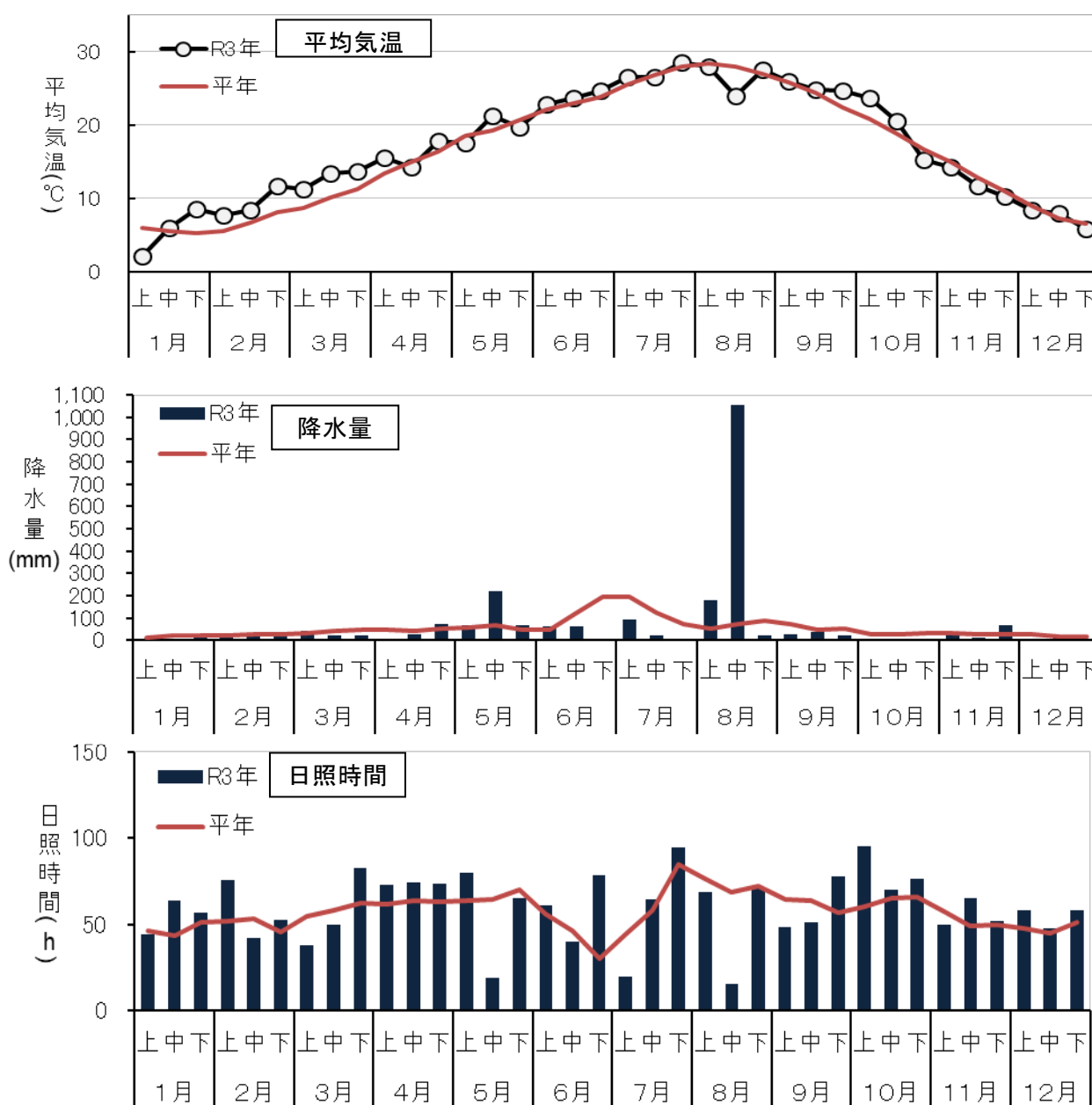


図1 令和3年の旬別平均気温、降水量及び日照時間（大牟田市 アメダスデータ）

[2] 主な気象とその対応

梅雨入りが例年より 20 日程度早く、その後も平年に比べ曇りや雨の日が多い見込みで農作物への影響が懸念された。

8 月 11 日からの長雨により浸・冠水による被害が、水稲、大豆、施設園芸、果樹、畜産で発生した。

台風は、10 号が九州北部に接近、9 号が九州南部に 14 号が福岡県に上陸した。

(1) 5 月 20 日の大雨

5 月 20 日（アメダス大牟田 115.5mm、1 時間最大降水量 20.5mm、アメダス柳川 100.0mm、1 時間最大降水量 20.5mm）の大雨により、小麦で倒伏の被害が見られた。

(2) 8 月 11 日～15 日の大雨

8 月 11 日～15 日（アメダス大牟田 855.0mm、アメダス柳川 713.5mm）の大雨の影響で、水稲の冠水、大豆の浸・冠水、イチゴ苗の浸・冠水、アスパラガス及び花きほ場の畝上浸・冠水、ブドウ、イチジク、キウイ園の浸水、牛舎内の浸水などの被害が発生した。特に大豆では浸・冠水後に枯死するなど被害は甚大であった。

また、機械類（暖房機・光合成促進装置・かん水ポンプなど）への浸・冠水の被害も見られた。

(3) 台風 14 号の被害

台風 14 号（9 月 17 日 アメダス大牟田 最大瞬間風速 22.2m/s（18:55 南西）降水量 13.5mm 三池港満潮時刻 19:22）の被害は、有明海沿岸などで水稲、大豆、オクラ、イチジクに潮風害、施設でビニルやパイプの破損などの被害が発生した。

(4) 普及指導センターが提供した気象災害注意喚起及び対策情報

下記の技術対策情報の発信、また各品目別に事前対策及び被害が発生した時には早期回復のための技術対策情報を提供した（表 1）。

表 1 主な気象災害対策情報

期 日	情 報 の 内 容
令和 3 年 5 月 18 日	長雨・日照不足に関する技術対策
令和 3 年 6 月 25 日	高温及び梅雨期の大雨に対する農産物等への技術対策
令和 3 年 7 月 21 日	高温・小雨に伴う農作物等の技術対策
令和 3 年 8 月 5 日	台風 9 号及び 10 号の接近に伴う農作物等の技術対策
令和 3 年 8 月 12 日	8 月 16 日にかけての大雨による農作物等の技術対策
令和 3 年 9 月 10 日	台風 14 号接近に伴う農作物等の技術対策
令和 3 年 11 月 16 日	原油価格高騰に対する技術対策
令和 3 年 12 月 23 日	農作物等の寒害及び雪害の被害防止に向けた技術対策

(5) 8月11日からの長雨被害写真



柳川市大和町大豆ほ場冠水被害の状況（8月12日）



みやま市瀬高町大豆ほ場被害の状況（8月16日）



みやま市瀬高町イチゴ高設育苗被害の状況（8月15日）

IV 令和3年度現地活動情報及び展示ほ成果の概要

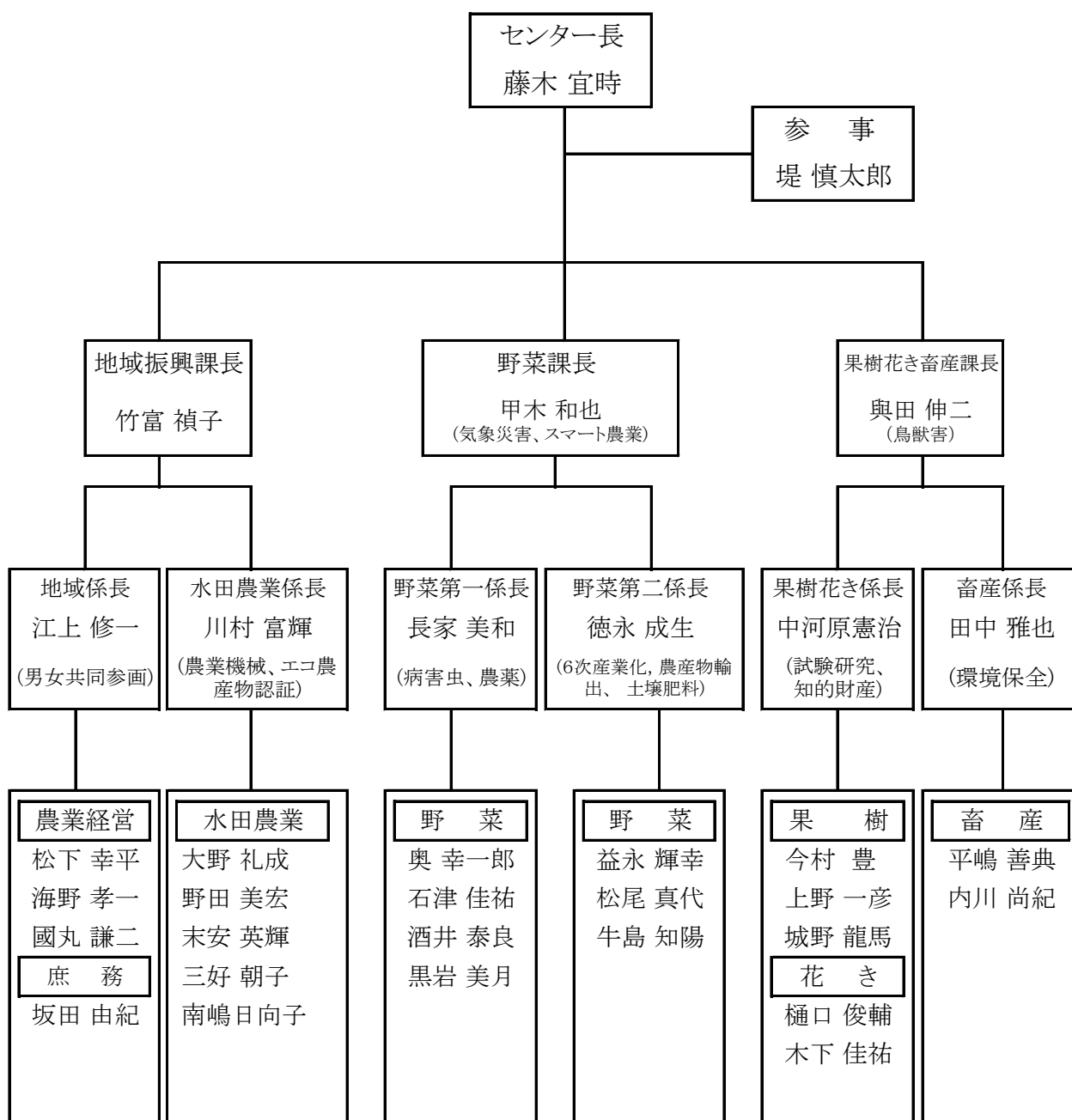
[1] 現地活動情報

No.	表 題
1	新規栽培者が栽培の基礎を学ぶ
2	日射比例灌水について情報交換
3	大豆の収量向上にむけて
4	初夏の味覚すももの出荷始まる
5	イチゴ栽培の基礎を学ぶ
6	JAみなみ筑後ダリアリキュウソウ研究会花育活動
7	次作に向けて土づくりを学ぶ
8	第11回ちく和会共進会が開催されました
9	大豆の高品質安定生産に向けて
10	柑橘部会青年部で現地研修会を開催
11	令和3年度の南筑後地域農業青年アカデミーを開講
12	大豆の適期播種に向けて
13	大豆の部分浅耕一工程播種が拡大中
14	今後のミカン生産について意見交換
15	イチジクの出荷始まる
16	南筑後地域新規就農者研修会を開催
17	シャインマスカット出荷最盛期を迎える
18	永続的な担い手の育成に向けて
19	酪農の暑熱対策研修会を開催
20	LAIと光を有効活用したナス生産に向けて
21	花き若手生産者を対象とした研修会
22	初級パソコン簿記講座を開催
23	イチゴ栽培の基礎を学ぶ②
24	YouTubeで温州ミカン「北原早生」をPR
25	農業経営セミナーを開催
26	麦類の収量安定・品質向上に向けて
27	ゲノミック研修会を開催
28	イチゴの生産環境モニタリングによる技術改善
29	温州ミカン「北原早生」出荷量1,000t突破！！
30	第3回イチゴ営農基礎講座を開催
31	南筑後と八女の4Hクラブ員が農業基礎知識を競う
32	ガーベラ研修会を開催
33	青年農業者が農業経営の目標や地域活動を発表
34	集落営農法人の経営安定に向けて
35	冬春ナスのLAIを指標とした整枝方法の確立に向けて
36	青年農業者が6次産業化・土づくりを学ぶ
37	令和3年度南筑後地域農業青年アカデミー修了式
38	若手イチゴ生産者の栽培技術改善を支援
39	花き若手勉強会を開催
40	冬春なすの効率的な環境制御技術確立に向けて
41	大豆の産地復活にむけて
42	立茎スタディツアーを開催
43	水田農業の省力・低コスト化に向けて

[2] 主な展示ほ成果の概要

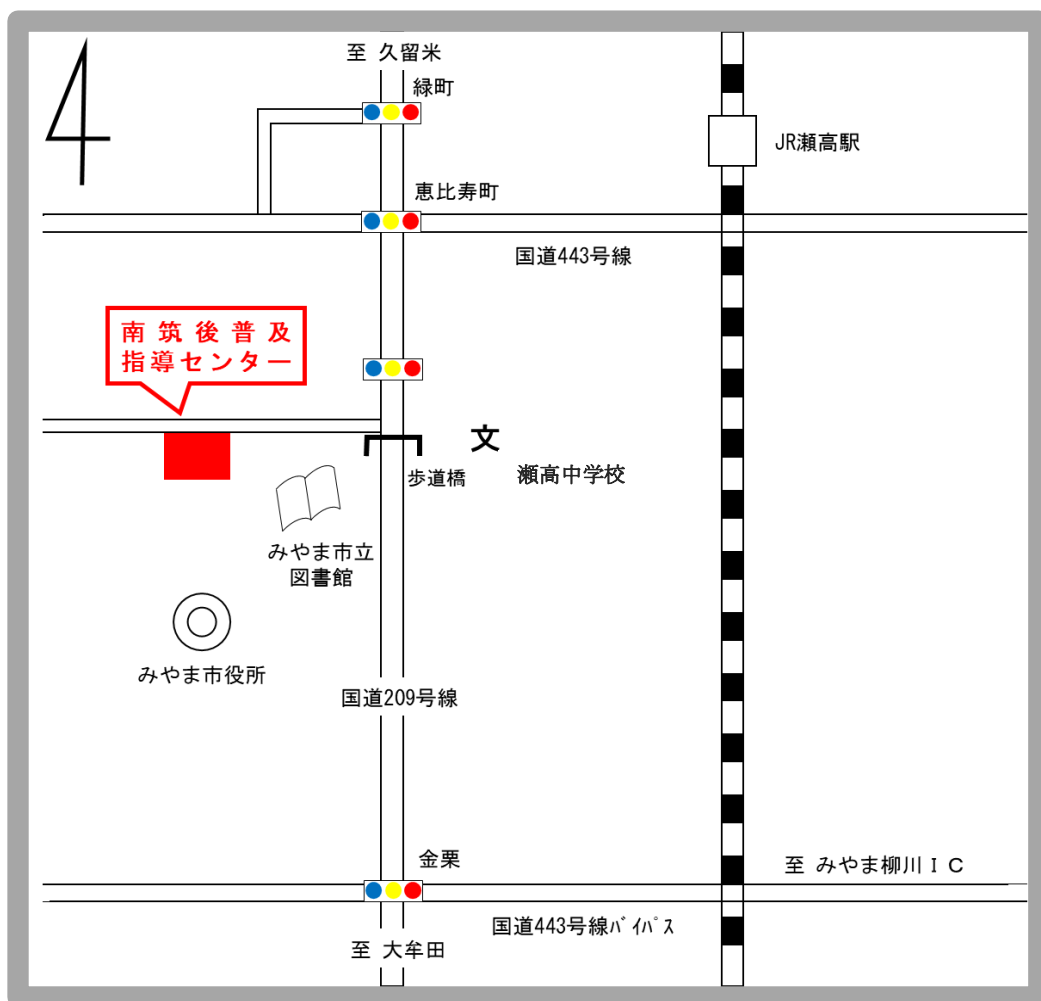
対象作物	設置場所	課題及び成果概要
大豆	柳川市 みやま市 大木町	<p>大豆作における部分浅耕一工程播種の効果の確認</p> <p>麦収穫後、麦うねをそのまま残し、改造ロータリーで播種条を浅く、条間を標準の深さで耕起しながら大豆を播種する「部分浅耕一工程播種」の展示ほを各地区に設置。通常の二工程播種と比べて降雨後に早く播種が可能であり、生育量を確保できることを確認した。</p>
ナス	柳川市 みやま市	<p>新規天敵資材「リモニカスカブリダニ」による防除効果の確認</p> <p>新規天敵資材であるリモニカスカブリダニは低温環境での生存性が良好であり、厳寒期における天敵定着数が多いことが示唆された。タバコカスミカメなどの複数の天敵と組み合わせることで、冬春ナスにおける安定した害虫防除体系が期待される。</p>
トマト	柳川市	<p>冬春トマトにおける土着天敵タバコカスミカメを用いたコナジラミ類防除法の確立</p> <p>令和3年5月までの調査では、定植後、土着天敵タバコカスミカメの放飼により栽培終期までコナジラミ類の増加を抑制することができた。また、殺虫剤の散布回数が慣行防除体系より減少し、殺虫剤費用を32%削減することができた。令和3年産では、さらにタバコカスミカメとコナジラミ類忌避剤を組み合わせ、防除体系を検討している。</p>
キウイフルーツ（甘うい）	みやま市 大牟田市	<p>「甘うい」における低糖度要因の解析</p> <p>「甘うい」は果実階級2L、糖度16度以上を生産目標に掲げている。しかし、2L以上の果実量は増加しているが、低糖度園があるため全園地対象に過年度実績でグループ分けし、低糖度要因解析を行った。調査結果より、結実年数の進行に伴い短果枝が増加し、葉果比が低下することが、低糖度要因の1つと考えられた。</p>
ダリア	みやま市	<p>ダリアにおける炭酸ガス施用の効果検証</p> <p>生産者2戸の現地ほ場（面積各10a）において炭酸ガス施用試験を実施した。炭酸ガスの施用により、収量が増加し、品質は慣行栽培と同等であった。</p>

V 普及指導センター活動体制



※ ()は窓口

南筑後普及指導センターへのアクセス



福岡県筑後農林事務所

南筑後普及指導センター

〒835-0024

福岡県みやま市瀬高町下庄800-7

TEL:0944-62-4191 FAX:0944-63-4643

E-mail:nanchiku-dlc@pref.fukuoka.lg.jp

URL <https://www.pref.fukuoka.lg.jp>

/soshiki/4705209/

高速道路でお越しの方

・九州自動車道「みやま柳川IC」から約3km

公共交通機関でお越しの方

・JR鹿児島本線「瀬高駅」下車徒歩15分

福岡県行政資料

分類記号 PA	所属コード 4703516
登録年度 03	登録番号 0001